

津門大塚町遺跡第6次調査の成果

園原悠斗（公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター）

1. はじめに

兵庫県西宮市津門大塚町に所在する津門大塚町遺跡は、津門川と武庫川に挟まれた沖積低地上に立地する。当遺跡は、これまでに西宮市教育委員会（現西宮市文化財課）によって5次にわたる調査が実施されており、弥生時代から鎌倉時代にかけての遺構と遺物が見つかっている。詳細については、本誌掲載の藤原亮太による「津門大塚町遺跡における既往の調査と最新の調査成果について」を参照されたい。今回は第6次調査にあたり、兵庫県立西宮総合医療センター（仮称）整備に伴って実施した。当調査は3つの調査区（1～3区）に分かれており、総面積は6,513㎡である（図1）。調査の結果、平安時代から鎌倉時代（以下、第1面）と、古墳時代から奈良時代（以下、第2面）の遺構と遺物を検出した。本誌ではそのうちの第2面の古墳時代の成果について紹介する。

第2面では、古墳12基、竪穴建物38棟、大壁建物1棟、土坑、溝、ピットを検出した。竪穴建物は1区に集中しており、古墳は1区で3基、2区で2基、3区で7基検出した。1区は2区と比べて30～40cmほど標高が低く、3区から2区へ向けて緩やかに高くなる傾向にある。古墳時代当時の土地利用として、沖積低地の中でも微高地化した箇所にも古墳を築造し、その縁辺にあたる後背湿地上の安定土壌に居住域が造られていたと言える。また、1区と2区の間には谷状地形

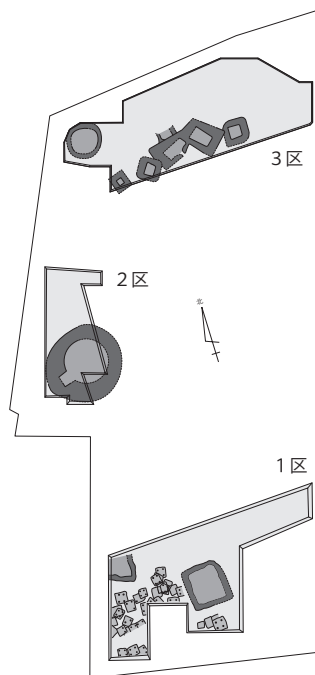


図1 第6次調査位置図

が見受けられ、流路ないしは埋没浅谷があった可能性が考えられる。以上の微地形を前提に、各遺構について概観する。

2. 古墳群について (図2・3・4)

成果の概要 前章で示したように、今次調査では埋没古墳を12基検出した。その内訳は円墳3基、方墳9基である。いずれも後世の削平によって、墳丘及び埋葬施設は既に失われており、周濠のみの検出である。古墳の築造時期は大きく、前期、中期前葉、後期前半、後期後半の4つに分けることができる。以下、それぞれの時期別に簡潔に概要を示す。

古墳時代前期 前期に該当するのは3区で検出した1号墳のみである。1号墳の墳形は円墳で、推定される直径は10m、周濠を含むと約12mである。遺物は僅少で、築造時期及び埋没時期は判然としない。1号墳周辺では、布留式併行頃の土師器が出土しており、この辺り以外からは上述の時期の土師器等は見つかっていない。よって1号墳を現状では古墳時代前期頃と位置付ける。

古墳時代中期前葉 1区で検出した9・10号墳が該当する。10号墳は調査区東側で検出した方墳である。部分的に攪乱によって滅失している。墳丘の規模は、一辺13mで、周濠の検出規模は幅2m、深さ20～30cmである。東周濠からは多量の須恵器と土師器、そして朝鮮半島で生産された陶質土器(写真1)が出土している。9号墳は調査区北側西寄りで見出した方墳である。多くが調査区外に伸びるため、詳細な規模は明らかではない。

古墳時代後期前半 1区で検出した11号墳と、2区で検出した12号墳が該当する。切り合いの関係から図3・4中には示せていない。11号墳は調査区西側で検出した円墳である。直上に竪穴建物が造られていたため、上面が酷く削平されている。周濠の南東部には削り残しによって形成された幅1.0mの陸橋が確認できる。周濠からは少量の須恵器片とともに動物骨と歯が出土している。12号墳は8号墳直下で検出した。全景は捉えられていない



写真1 10号墳東周濠の陶質土器

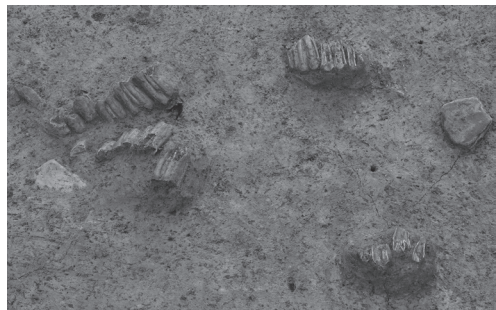


写真2 5号墳周濠北西隅出土の牛歯

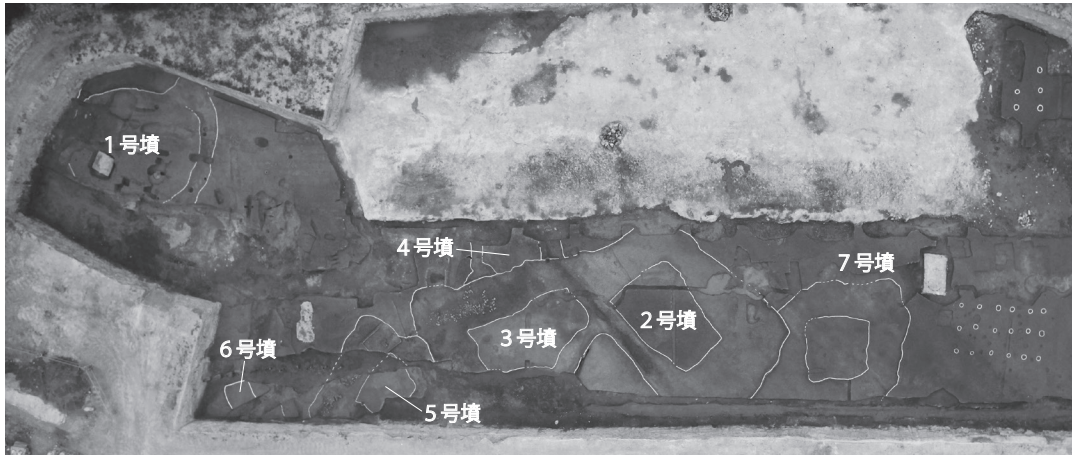


図2 3区で見つかった古墳

ものの、延長約 15 mの溝と南東部で直角に曲がる隅部を検出した。周濠からは多量の埴輪と、須恵器・土師器が出土した。埴輪は南東部隅部付近に集中している。これらの埴輪とともに、数種類の種実が見つかった点は注目できる。

古墳時代後期後半 2区で検出した8号墳と、3区で検出した2～7号墳が該当する。2～7号墳は方墳である。弥生時代の方形周溝墓群を連想するように群集しており、2号墳と3号墳は周濠を共有する。墳丘の規模は一辺8～19 mと多様で、2・3号墳は長方形を呈する。周濠の規模は幅4～6 mで、墳丘肩が流出していることを加味しても、墳丘の規模に比べて周濠の幅が広い傾向にある。各古墳周濠からは埴輪と須恵器が出土する。特筆すべきは、5号墳周濠から出土した牛馬の歯である。5号墳は調査区南側西寄りで見出しており、南側周濠は調査区外へと続く。件の牛馬の歯（写真2）は、周濠から見つかっている。牛歯は周濠北西隅で濠底から約 15cm浮いて出土している。一方で馬歯は周濠南西隅からの出土で、須恵器の大甕を破碎した破片を敷いた（以下、須恵器敷き）上に据え置かれている。須恵器敷きは面が平になるように計画されており、頸部から口縁部にかけての破片は選択的に除かれている。周濠内に須恵器敷きと馬歯を置く例は全国的に見ても稀である。また一つの古墳周濠から牛馬が供献される調査例は極めて少ない。

一方で、2区で検出した8号墳は造り出しを持つ円墳である。墳丘の規模は直径 24 mであり、周濠を含めると推定径は 29 mを測る。墳丘南西側に一辺約 2 mの造り出しが付随する。周濠内からは多量の埴輪と、須恵器が出土しており、その出土位置は造り出し北側のくびれ部周辺に集中する。埴輪は円筒埴輪と形象埴輪である。形象埴輪は家形・石見型・鶏形・馬形・人物埴輪が出土しており、バラエティに富んでいる。3区で群集する方

墳群（2～7号墳）は円筒埴輪が中心の出土傾向であるため、古墳間で埴輪の器種選定をおこなっていると判断できる。墳形や墳丘規模、形象埴輪の量の差異などから総体的に判断すると、2～7号墳と8号墳の間に階層差が生じていることは確実であろう。ただし、8号墳を首長墳であるという判断については本誌上では断定を控え、今後の整理作業を待ちたい。

3. 竪穴建物群について（図4）

成果の概要 古墳時代に属する建物は全て1区から見つかっており、竪穴建物38棟、大壁建物1棟の計

39棟を数える。これらの建物は、

幾重にも重なる激しい切り合い関係をもち、長期的な集住のなかで頻繁に建て替えが行われていたことが窺える。竪穴建物及び大壁建物の時期は、埋土や床面直上で出土した土師器や須恵器から中期前葉と後期後半に分けることができる。ただし、調査速報段階であるため、全ての竪穴建物の時期が特定できていないわけではない。また竪穴建物群の直上の遺物包含層からは、後期前半に位置づけられる須恵器も出土しており、今後の整理作業によって建物の帰属時期が変化する可能性が十分にあり得る。以下、それぞれの時期別に概要を示す。

古墳時代中期前葉 調査区南西部を中心に展開する。代表的な建物として、SH1056・1057・1058が挙げられる。これらの建物の平面形は正方形指向の方形で、一辺約4mと当該期の一般的な建物と比べてやや小ぶりである。支柱穴は4本で構成されており、いずれの建物にも周壁溝が備わっている。建物の床面からは、須恵器や土師器が出土するほか、石製紡錘車が1点見つかっている。

古墳時代後期後半 調査区西側の密集箇所や、南東側の一角に展開する。本調査で検出した竪穴建物の多くが該当するものと考えられる。これらの建物の平面形は方形である。

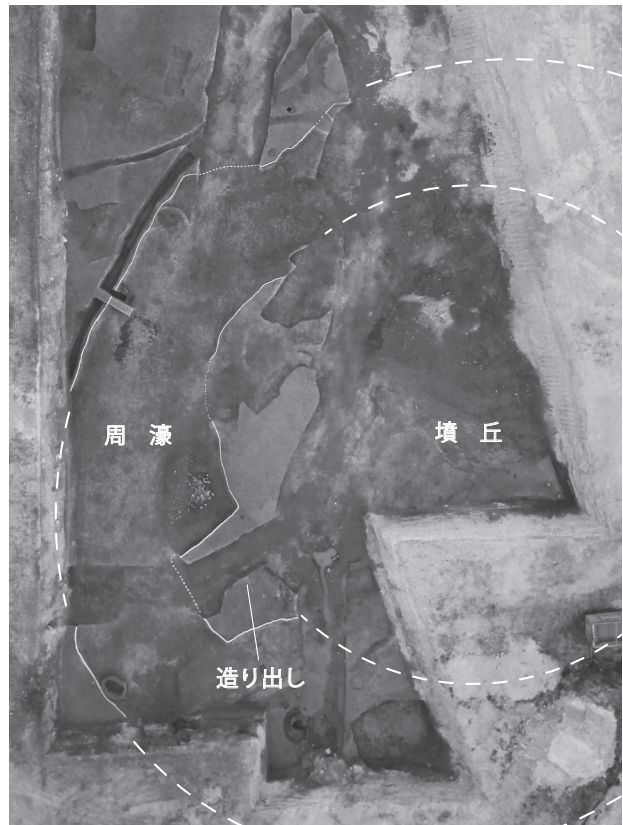


図3 2区で見つかった8号墳

建物の規模は中期前葉と大きく変わらず、一辺約4 m程度である。カマドを持つ建物は極めて少なく、2棟のみである。建物の床面からは、須恵器や土師器、鍛冶関連遺物が多く出土し、完形の須恵器坏身や高環が一定量出土する傾向にある。一般的な建物以外に、長方形を指向する竪穴建物 SH1153 や、大壁建物 SH1198 が検出されている。そのうちの SH1153 は、密集する西側の一群から南東側に離れて位置する。長辺 3.8 m、短辺 3.0 m で、周壁溝は備わっていない。支柱穴は2本で、屋内土坑が1基備わっている。平面形や支柱穴の数など、他の竪穴建物と比べて特徴的である。これらの竪穴建物群の特徴として挙げられる事象が、鍛冶関連遺物が多く出土することである。図4の★印は、鍛冶関連遺物が出土している遺構である。分布を見ると、長方形指向の竪穴建物 SH1153 を中心とする南東側の一帯に集中することが明らかであり、この一帯では直上の遺物包含層からも同様に鍛冶関連遺物が出土する。これらの遺構の帰属時期は、伴出する須恵器や土師器から古墳時代後期後半（6世紀後半）であり、まとまりがある。鍛冶関連遺物は、大きく鉄塊・鉄滓・フイゴの羽口・砥石・金床石に分けられる。鉄塊は、鉄鉱石を精錬して抽出した素材鉄（荒鉄）を指す。この素材鉄を炉で熱した際に、炉底に堆積生成された不純物が鉄滓であり、今回の調査では大小合わせて30点以上、重量にして7kg以上もの鉄滓が出土している。なかには最大長が15cmを超えるものや、重量1kg前後の大型の椀形滓も複数出土しているこ



図4 1区の主要遺構

とは注目される。鉄滓の裏面形状は鍛冶炉の底の形状を現し、その大きさは炉の規模を示すことから、津門大塚町遺跡の鍛冶炉は大型のものが多くと判断できる。また、炉内に送風するためのファイゴの羽口は複数個出土しており、鉄滓にも羽口の取付きの痕跡が見受けられる。鉄滓のなかには、この羽口取付き痕が双方向に確認できる個体もあり、送風量を増大させた大型の炉が存在したことの証左と言えよう。砥石については、砥目の粗い粗砥と、細かい仕上げ砥が見受けられる。仕上げ砥は砥面がカーブを描き、摩滅が著しいため、高い使用頻度を示している。また粗砥は金床石との兼用であり、砥石として利用していた一方で、鉄器製作や加工を行う台座としても利用していたことが伺える。また、刃の研ぎ出し時に生じた線状痕や、規則的に孔が穿たれている金床石も確認でき、製品の製造の様子が垣間見える。以上のような遺物の様相から、鉄器の加工を主とする鍛錬鍛冶（小鍛冶）のみならず、素材鉄から扱う精錬鍛冶（大鍛冶）が行われていたと判断できる。古墳時代の精錬鍛冶の様相が見受けられる遺跡は少なく、重要な調査成果であると言える。

4. まとめ

今回調査を実施した第6次調査によって、古墳時代の居住域と墓域の様相が明らかとなった。居住域と墓域は中期前葉（5世紀前葉）から後期後半（6世紀後半）のなかで形成時期を同じくすることは注目できる。また、居住域では大壁建物を、墓域では陶質土器や牛馬歯といった朝鮮半島との有機的な関係が推測できる資料が確認できた点は、当遺跡の位置付けを考えるうえで非常に重要である。また居住域では後期後半（6世紀後半）の鍛冶関連遺物が多く出土した点も、朝鮮半島からの技術伝播や王権との繋がりを検討できる良好な資料である。

西宮市域では、古墳時代中期～後期の集落が明らかとなっている高畑町遺跡や、北口町遺跡、高松町遺跡が所在する。いずれも現在の阪急西宮北口駅周辺であり、津門大塚町遺跡とは2km圏内と極めて近い。とりわけ高畑町遺跡では、旧河道から古墳時代中期頃の土器と共に多量の木製品が出土しており、周辺での大規模な木器生産の様相が伺える。手工業生産集団の集落という点では、津門大塚町遺跡と高畑町遺跡は類似しており、当該地域一帯において複数の集団を包括した大規模集落が形成されていた可能性も考える必要があるであろう。今回の発掘調査によって、西宮市域のみならず、阪神地域・近畿地方全体における古墳時代の社会をより詳細に明らかにする大きなきっかけを得たと言える。今後の整理作業に期待したい。

津門大塚町遺跡における既往の調査と最新の調査成果について

藤原亮太（当館学芸員）

1. はじめに

令和4年度に（公財）兵庫県まちづくり技術センターが実施した津門大塚町遺跡の発掘調査において、市内初の埋没古墳や鉄器製作が推定される遺物・遺構が見つかるなど、大きな発見があった。この発見を受け、当館では兵庫県立考古博物館と連携し「津門大塚町遺跡発掘調査速報パネル展（令和5年1月31日～3月5日）」を開催した。

本稿では津門大塚町遺跡において西宮市が実施した既往発掘調査の概要を整理し、近年当市が実施した調査の出土遺物について紹介する。

2. 津門大塚町遺跡における既往の発掘調査の概要

津門大塚町遺跡はアサヒビール西宮工場を解体する際に発見された遺跡である。本遺跡は周辺に大塚山古墳等の遺跡が知られ、未知の遺跡が広がっている可能性が高い場所であることから、平成25年に当市が調査等を行い発見に至った。

津門大塚町遺跡では当市により発掘調査（第1～5次）と確認調査が実施されている。

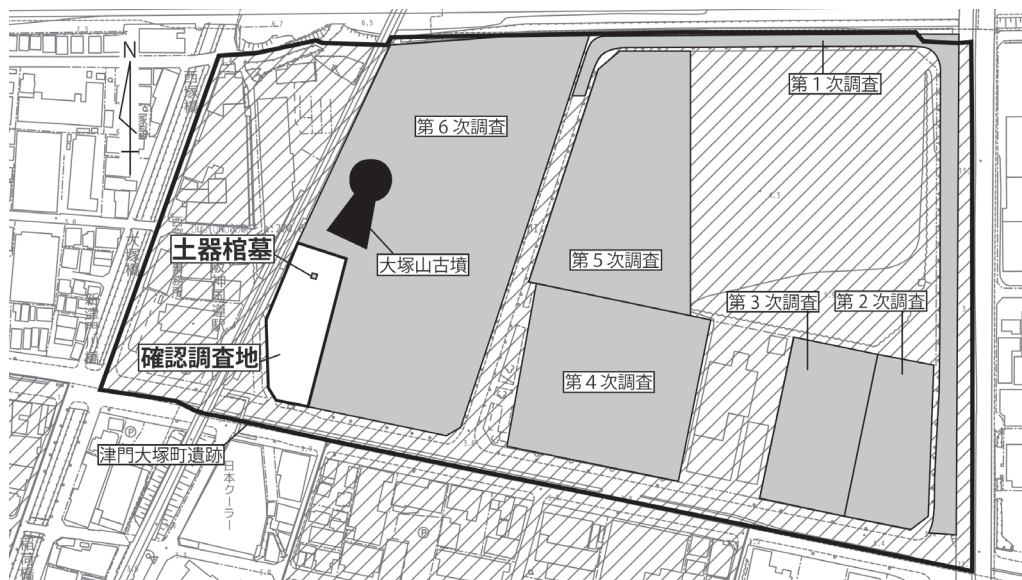


図 津門大塚町遺跡における既往の調査地

津門大塚町遺跡は弥生時代～鎌倉時代と存続期間の長い遺跡である。出土遺物も多様で、土師器、須恵器、埴輪、鞆羽口、緑釉陶器、瓦器、重圏文軒丸瓦等が出土している。遺構は須恵器が大量に出土した溝をはじめ、掘立柱建物、竪穴建物、井戸等が検出されている。

3. 最新の確認調査で見つかった土器棺墓について

当市による津門大塚町遺跡の最新の調査は、令和3年に公園造成に先立ち行った確認調査である。この調査では須恵器や埴輪等の遺物や、古墳時代後期後半と考えられる土器棺墓を検出した（写真）。土器棺墓は土器を棺とした土坑墓で、今回見つかった土器棺墓は須恵器の甕と土師器の甕を組み合わせた事例であった。須恵器・土師器ともに土圧で上側が下に落ち込む形で潰れており、棺内に人骨等の被葬者の存在は確認できなかったが、副葬品として須恵器の坏身2点が土器棺の中に入っていた。また、棺外では、口縁の合わせ口の脇から須恵器の坏身が1点見つかった。



写真 土器棺墓

4. まとめ

第6次調査でも土器棺墓は見つかっているが、合口の土器棺墓は見つかっていない。これらの土器棺墓がどのような関係性（同一集団あるいは全く別の墓なのか）にあるのかは現段階でははっきりしておらず、今後の検討課題である。公園用地はあくまでも確認調査で、土地の一部でしか調査を実施しておらず、調査をしていない場所や調査地周辺には、古墳や土器棺墓が眠っている可能性があり、今後の調査に期待したい。

参考文献

大手前大学史学研究所・西宮市教育委員会 2018年 『新発見・西宮の地下に眠る古代遺跡』

目次 CONTENTS

津門大塚町遺跡第6次調査の成果（園原悠斗）…1

津門大塚町遺跡における既往の調査と最新の調査成果について（藤原亮太）…7

西宮市立郷土資料館ニュース第56号 2023年3月31日発行